

グループ紹介

天然藍染——木灰を活用して

〈グループ・藍〉

藍染のブラウスとスカート姿の野口さんは、仲間二人と一緒に、藍染に魅せられたいきさつから、現在の活動の様子をにこやかに話してくれました。

「ボランティア『徳島に木灰を送る会』の会員として、藍染展が沼津で開催された三年前に講習を受けたのがきっかけで、藍染を始めました。藍を建てる材料『染』を徳島から取り寄せ、木灰汁・消石灰等を缶に入れて発酵するまで待ちます。毎日の世話は、子供を育てるのと同じで、目が離せません。

天然藍染は、人工藍染と違って非常にめずらしく、国内でも数える程しかないそうです。常時活動しているのは六人くらいですが、これからも工夫して続けていきたいと思えます。」

木灰は、沼津の水産加工業者の削り節加工から出る廃棄物です。天然藍染は地球をきれいにする環境保護にも役立っているというのが自慢です。



連絡先 沼津市根古屋四七六一
電話 〇五五九(6)二二五〇
代表者 野口 日出子



本との出会い、人との出会い

〈興津中の子の読書クラブ・カンガルー〉

昭和五十六年に結成された「カンガルー」は、今年で満十年を迎えました。小学六年生以下の子供を持つ親子を対象に、現在二十六組、総勢八十人の大所帯です。

大人になっても忘れられない思い出——お母さんの膝に座って本を読んでもらったときの声、温もり——「読み聞かせ」のすばらしさを求めて、月一回、公民館で活動しています。一年ごとに、世界の民話、詩といったテーマを決め、今年も、「四季と自然」。季節感が失われている今、「よもぎだんご」や「七夕」などの本を通して、親子で季節と親しんでいきます。

「幼い子がいる今だからこそ、このときを大切に過ごしたい。」と、語るメンバー。子育ての醍醐味を味わっているお母さん方の、すがすがしさと、名前のとおり、カンガルーの親子のほのほとした温かさが印象的でした。

連絡先 清水市興津公民館
電話 〇五四三(6)一一一一
代表者 飯田 美智

四季を味わう

〈手作りサークル・くすのき会〉

目の前に出されたのは、瓶詰の竹の子と夏みかんのマーマレード。どちらも今作ったばかりのようで、とてもおいしそうです。このほかにも、季節に応じて、こんにゃく、ハム、みそなどを手作り加工しています。

公民館の農産物加工講座を受講していた主婦たちが、講座修了後も活動を続けようと、昭和六十二年四月「くすのき会」は発足しました。現在メンバーは二十一人。月に一、二回多目的研修センターに集まって、地元で取れた四季折々の農産物を使い、加工食品の手作りを実践しています。

新鮮な材料で、安全に、安価に、おいしい加工食品作りというだけでなく、この活動を通じて、地元への愛着、四季への親しみが増したそうです。さらに、名前の由来のとおり、「地に根、天に葉を広げるくすの木のよう」に、友人や家族など人との絆も深くなったと、いいことづくめだそうです。

連絡先 湖西市太田九四五
電話 〇五三(6)〇八〇九
代表者 石田 マチヨ



浜松に住んで

リュウ
チン
陳

シュウノウ
ヘキウン
秋農
碧雲

御夫妻

台湾出身。劉さんは、1981年に来日。ヤマハの野球部で投手として活躍され、1987年都市対抗野球大会で優勝した時、最優秀投手に贈られる橋戸賞を外国人として初めて受賞。

奥様の陳さんは、1988年結婚と同時に来日。現在、専門学校で中国語の講師をしている。



1歳になる娘の芝吟(しぎん)ちゃんど

〈台湾の結婚事情〉

劉さん 台湾では夫婦別姓が一般的です。子供が生まれると、子供は夫の姓を名乗ります。

結婚式は自分たちのためではなく、お互いの家族のためのものという考えがありますから、親や兄弟の友人なども含め、五百人から千人くらいの人が集まります。

陳さん でも、親に頼らず自分たちのお金だけでやるので、日本のように豪華ではありません。自分たちのこれからの生活のことがありますから。

〈日本での仕事〉

陳さん 台湾の女性は結婚・出産後も働き続けるのはあたりまえです。皆、家族のためだけでなく自分の生き方として仕事を続けようとしています。

職種ごとの仕事は明確できつちり区分けされている台湾と違い、何でもこなさなければならぬ日本の仕事のやり方には当初戸惑いました。英会話の講師をしていました。教えることだけよいと思っていたら、発表会やクリスマスパーティーのときなど、その準備まで手伝うと知り、驚きました。でもとてもいい経験でした。また、日本では生徒も親も、先

生に對してとても丁寧で、先生を尊敬する態度に感心しています。

台湾で中学校の教師をしていたときより仕事をするのが楽しいです。

〈日本語のこと〉

陳さん 子供を生むときに日本語がわからないと困るだろうという不安があったので、日本語が話せるようになってから生もうと考えていました。来日して一年は辞書を片手に、毎日テレビのドラマを見ていました。また同じアパート

の階下の奥さんと、週二、三回私は英語を、彼女は日本語を教え合いました。二年目に英会話スクールの講師となり、子供たちに教えながら日本語を覚えていききました。そうして三年目にこの子を生んだのです。

〈子育てのこと〉

陳さん 近所の若いお母さんたちは、子供に對してとても辛抱強いと思います。私はつい叱ってしまっているので、いつもすばらしいことだと感心しています。でも、子供の英会話の講師をしていたときには、お母さんが何でも子供のことに手出ししているのを見て、あまりよくないことだと思いました。親は、時折必要なときだけ手伝ってやる

ほうがいいのです。娘には日本の教育を受けさせようと思いますが、あまり勉強、勉強と押しつけたくない。ただ、悪いことはしないと

いうことは、しっかり教えたいと思います。あとは子供自身に考えさせ、自分で選んだ道を進ませたいと思っています。

〈夫婦のこと〉

劉さん 台湾では共働きが普通ですから、皆よく奥さんを手伝います。家族の一員として、夫が家事を手伝うのはあたりまえです。それに、仕事を終えての家事は自分の気分転換にもなりますよ。

陳さん 御近所を見てみると、夫婦で一緒に行動する人たちが少ないような気がする。私たちは休日にはいつも一緒にです。

〈浜松の印象〉

陳さん 人情があつて、皆さんとても親切です。住みややすい所なので気に入っています。これからも浜松に住みたいと思っています。私はコンサートや歌劇を観ることが好きなのですが、浜松ではその機会が少なく、残念です。駅前に計画されているアクトシティに、大きな音楽ホールもできると聞いていますので、私も楽しみです。

「幸せなのになぜ涙がでるの」
アグネス・チャン 著
 労働旬報社 一、三〇〇円



高校三年の春のことでした。つ
 かの間、受験勉強から解放された
 私は、修学旅行先の松江にいまし
 ました。宿のテレビでは、一人のアイ
 ドル歌手が、たどたどしい日本語
 で、『ひなげしの花』を一生懸命、
 歌っていました。ヒールの高い靴、
 腰まで伸びた長い髪、短いスカ―
 ト。その少女と私は、同じ十七歳
 なのに、まるでちがう世界にいま
 した。

今でも著者の名を耳にすると、
 私は、松江のことを思い出します。
 あれから二十年。社会を取り巻く
 状況は、著しく変化を遂げました。
 また、女性の生き方が社会的な意
 識の変化によって、多様化してき
 た二十年でもありました。

そうした中、著者は芸能活動を
 休止し、児童心理を学ぶためカナ
 ダへ留学、そして結婚、出産、子
 育て……その間には、「アグネス論

争」で、世論を沸かせました。現
 在は、二児を連れて、比較文化論
 と、異文化コミュニケーション論
 を研究するためアメリカへ留学中。
 あのととき、テレビの中の遠い世界
 にいた少女は、固定観念にとらわ
 れない行動力のある一人の女性と
 なって、今、私たちの前にいます。

この本は、著者がこうした留学、
 結婚、出産、子育てを通して感じ
 たことを、「今、女性が立ち向かっ
 ている社会問題」として、見つけ
 直しています。

女性が妻として、母として、そ
 して人として、向上心を持って生
 きていこうとするとき、そこには、
 多くのハードルがあります。仕事
 と家事の両立、仕事を続けながら
 子供を育てる大変さ、女性の肩に
 頼る家族の老い、一見幸せそうに
 見えながら、心が満たされない女
 性の増加。豊かな日本のはずなの
 に、「現実には、ほとんどの女性が、
 なにかを犠牲にして生きている」
 と、著者は指摘した上で、「日本の
 女性の生き方を社会が認識して、
 それをバックアップしていくシス
 テムをつくるのが、早急に必要」
 と語っています。

多くの女性たちが日々感じ、思っ
 ていること——それが、この本に
 は、たくさん詰まっています。

本の紹介



「旅は始まったばかり」 鈴木れいこ著
 定年後に夫婦で生きる場を求めて、国内から海外へ
 と旅をする。共に同じ夢に向かって努力しあう姿は、
 夫婦のつながりが薄れつつある現代に、新鮮な驚きを
 感じるとともに、自分の老後に対して勇気が湧く。
 ブロンズ新社 一、六〇〇円



「男たちは夢を捨てたのか」 松原淳子著
 サラリーマン、医者、会社経営者……等、十二人の
 団魂世代の男たちが語る人生、夢、家族。その素直な
 語り口に、この世の中、女ばかりが大変という思いか
 ら、男も大変なんだなあという優しい思いが出てきて
 しまう。
 講談社 一、三〇〇円



「かげろうの家」女子高生監禁殺人事件 横川和夫／保坂 渉著
 世の中に衝撃を与えた「女子高生コンクリート殺人」。
 犯人の少年たちの背後には何があるのか、冷静に見つ
 めたレポート。私たち一人一人が、いつも誰に対しても
 愛情を持って、生きていかななくてはならないことを
 痛感！
 共同通信社 一、三〇〇円



「子どもが消える日」 保坂展人著
 著者は、十六年間に申書裁判を続けたことから、学
 校事件の現場レポートを通して、子どもたちの現在の
 姿を的確にとらえている。今、子どもが子どもである
 ことを忘れ始めている。私たちが今こそ真剣に子ども
 の時代を取り戻せるよう考えなくては！
 六興出版 一、五〇〇円



「30歳で生まれ変わる本」 安井かずみ著
 30歳は本当の大人になるスタート地点である。女と
 して生まれ、その時代をとらえ、美しく、マイペース
 で生きていく大人の女が増えることを願う著者の熱い
 メッセージがあふれている。
 PHP研究所 一、一〇〇円

先生の産休

娘の小学校では、一年から二年は持ち上がり
のクラス。先生も持ち上がりで、子供たち
も親たちも大喜び。それもつかの間。最初の
授業参観で、一人の父兄が先生のお腹に目を
やり、

「もしかして……もう授業どころではない。
」学年の途中で、先生が変わるなんて困る。
「あのお腹だと今〇カ月ぐらいかしら。いつ
から産休かしら。」ひそひそ声が、先生の耳に
届きそうな感じである。——先生だって、人
間だもの、お産があつて当たり前——と割り
切れないのは、親ならば仕方無いことかもし
れない。

夫婦で釣り

最近、夫婦で「釣り」を始めました。何て
いうことを、多少なりとも年季の入ったしつ
とり落ち着いた夫婦が言うのと、釣りもとても
高尚に感じるし、その夫婦からも、洒落たセ
ンスが漂うように思いますが——皆様はどう
お感じでしょうか。

私と夫は、まだ結婚して半年を過ぎたところ
で、年季どころか、気合いすら入っていない
駆け出し夫婦です。

周囲をあつと驚かす電撃、しかも、性格は
「あつちとこつちを向いている」私と夫が結
婚したというのは、今思うとすごい暴挙。だ
から「夫婦で釣りを始めた」この事実には目
を見張るものがあるのです。こういう新たな
感動は、細胞を活性化してくれるようで、嬉
しいですね。と、感動しているのは私だけ

でも、当の子供たちの反応はと言えば、「先
生のお腹の中に、赤ちゃんがいるんだって。」

と目を輝かせて教えてくれた。「先生のお腹だ
んだん大きくなって重たそうだよ。」と心配し
ている。今は子供の数も減り、お母さんのお
腹の大きい姿を、見る機会も少なくなってい
る。子供たちは、日に日に大きくなっていく
先生のお腹を見ながら、何かを感じ取ったの
ではないだろうか。

同じ女性として、働きながら、子供を生み
育てていく若い先生に、大きな声援を送りた
い。女性が安心して、堂々と、子供を生み育
てていける世の中になってほしいと思うのは、
私だけではないと思う。

ポプリ



で「あつち向いている」夫にしたら、自分の
やりたいことに、何だかうるさいのがついて
来ているみたいだ……という具合で、姿に悠
然と構えていて、私はまるで、カバの髭を引っ
ぱるアリのようです。が、ともかくカバはカ
バ、アリはアリなりに、釣りのひとときを楽
しんでいます。カバさんは、仕掛けをアーン
と遠くに飛ばし竿を垂らして、後はポーとし
ています。時折、空や海の青に思いを馳せて
います。アリさんは、やっとエサつけに慣れ
たのに、エサのイソメに謝るのがクセになっ
てしまいました。竿を固定して、途中海水浴
をして来たら、竿を持たされ、眠くなり、眠
りながらも、ちん鯛を釣ってご満悦——

(S・O)

一冊のノート

「ノートが、戻ってきたわよ。」
横浜に住むSの声を聞き、

「やった！ ついに三十六人まわったのね。」
私は、思わず電話口で飛び上がってしまった。
三十六人とは、学生時代、ともにギターと
マンドリンの甘美な音色を奏でたサークルの
同期生。今や、北は北海道の札幌から、南は
九州の宮崎まで、全国にメンバーは散ってい
る。当時、部長だったSの妙案で、一冊のノー
トがまわり始めたのが、昭和六十三年の夏の
こと。わずかの切手代で誰もが気軽にポスト
に投函できるようにというSの気配りもあり、
ノートはB6の小さなサイズ。あれから丸三
年、ノートはメンバーの近況や想いを文字に
して、旅を続けた。

このノートが、突然、私の手元に届いたの
は十二人目、平成元年五月のことだった。ぎつ
しり書きこまれたノートは、どんな小説より
もおもしろい。既婚あり未婚あり、キャリア
あり専業主婦あり、Dinksあり三人の子
育てに追われる者あり、悩み多き者あり、新
婚旅行から帰ったばかりのルンルン気分の者
あり……。

いつの日か、みんな温泉につかりながら
ゆつくり再会する日までの、つなぎに——と、
いうSの想いは、手紙とも電話ともひと味ち
がった、思いがけない再会となって、三十六
人の心を結びつけた。

こんな楽しいノートを、皆さんも、なか
なかな会えない仲間とまわしてみませんか。

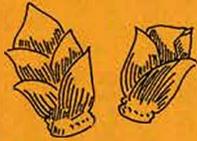
(M・Y)

平成3年度編集員紹介



小野田久美子
(岡部町)

「編集員」という肩書きが、私の肩には重すぎますが、5人の力で頂上目指して登って行く。この感動を忘れないようにしたい。



小粥 聖子
(浜松市)

何でも見たがり、やりたがりの私が、とうとう県庁婦人課に進出しました。仕事、家事プラスα、何でもかんでも「やらまいか」。



浅野 洋江
(浜松市)

遊ぶときも会社仲間、の会社人間から世界を広げたいと飛びこみました。編集の仕事はなかなか大変で苦勞しますが、刺激になります。



結婚して10年、静岡県民となって10年。日々の生活の中での発見、感動、疑問、迷い…を、少しでも表現できたらと思っています。



山梨 真澄
(清水市)



30年続けてきた子供と一緒にの世界から、編集員という憧れていた世界に入ることができたのは幸せ。若い気持ちで熱中します。



塩崎 史子
(沼津市)

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第19号

平成3年11月

編集・発行 静岡県環境・文化部 婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松工業技術センター 小杉思主世